

絵本——読み聞かせの役割と可能性

杉 浦 篤 子 清 水 貴 子

Abstract

Tadashi Matsui has been repeating for decades the view that “Picture books are not for children to read, but for adults to read to children.” Through the common experience of being read aloud to by adults, children enter the world of the picture book and come in contact with the power of story-telling. Through story-telling, they experience words by ear. As Tadashi Matsui says, “Spoken words are different from written words. Words seen with the eye are different from those heard with the ear.” Words taken in by ear are soon connected to words and children develop the ability to read by themselves. We focused on the picture book activities which children come into contact with via their kindergarten teachers while in their infancy together with the successful picture book “volunteer reader activity,” which has played a successful role in connecting picture books with children since the 1970s, and considered the power of picture books together with that of reading.

はじめに

2001年、国が子どもの読書についての政策を施行した「子供の読書活動の推進に関する法律」がそれである。その第二条（基本理念）にはこう謳われている。

「子ども（おおむね十八歳以下の者をいう。以下同じ）の読書活動は子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことができないものであることにかんがみ、すべての子どもがあらゆる場所において自主的に読書活動ができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない。」（2001年（平成13年）12月12日 法律第154号）

第三条から第六条には、（国の責務）、（地方公共団体の責務）、（事業者の努力）、（保護者の役割）が掲げられている。そこには子どもの読書に対するそれぞれの積極的な関わりが書かれている。子どもにとっての読書活動は主に児童文学、絵本が対象となり、その活動は主に公共の図書館や学校そして保護者つまり家庭ということになるが、子どもたちと読書の関わりには読み聞かせの活動も大きな役割を果たしているといえるだろう。読み聞かせ活動が社会に認知されるまでにはそこに携わった人たちの地道な努力があって現在の読み聞かせ活動につながる。それは日本だけでなく世界的にも社会の在り様の変化、家庭の変化つまり親子関係の変化、学校教育の変化などが背景にあったのである。読み聞かせには幼稚園、保育園、学校などでの同じ読み手と同じ聞き手が継続する場合での連続した活動と、読み手と聞き手が違い場も違うという場合もあり、年齢、集団の違いもあり、その形態はさまざまとなる。したがってここでは読書の中でも絵本の読み聞かせを中心として、絵本の文字を音声化した言葉、耳から入る文字としての言葉、子どもにとっての言葉に焦点を合わせる。さらに幼稚園での読み聞かせ活動、幼児教育に関わる人たちと絵本の関係、今盛んな読み聞かせボランティア活動の動向についても考察を加えるものである。

I. 読書活動調査から

絵本ブームと言われて久しいが、どれほどの絵本が出版され、どのように読者が手にしているのだろうか。書店の絵本コーナーの店員に「どの本が良いのか」、「一番人気のある本は？」という質問があるという。書店店頭には漠然と前に立つと何を選んだらよいのか正直迷うだろう。買いたい本を探すには、事前に何らかの方法で知識を得なければならない。手がかりを持たない親子にとっては、絵本を探すだけでも難しいものになっているのが、昨日今日の絵本事情だろう。絵本だけの出版点数が調査されたものはなかなかないのだが、2000 年以降、2008 年までの絵本出版点数を、財団法人大阪国際児童文学館が調査した貴重なデータがある。^{表1}

「新しい絵本を知る・楽しむ・考える」—— 2000 年代に出版された子どもの絵本から ——

2009 年 9 月 18 日 財団法人大阪国際児童文学館 川内五十子

表1 2000 年代の絵本出版点数

年度	絵本出版点数	児童出版点数	絵本の割合
2000	1107	2874	39%
2001	1292	3031	43%
2002	1347	2958	46%
2003	1412	3296	43%
2004	1635	3742	44%
2005	1747	3787	46%
2006	1847	4380	42%
2007	1466	3599	41%
2008	1486	3555	42%

統計の数字は『子どもと読書』編集部調査より転載

その調査をみると 2000 年の出版数が 1000 冊を超え、2008 年に 1486 冊となっている。それ以降、2013 年までの間も 1000 冊から 1500 冊前後の出版が続いていると考えられる。一か月に 120 冊余りが世に出ていることになる。その中には海外の作品で邦訳されたものも多数含まれる。店頭には把握しきれないほどに並んだ絵本を読者、買い手はどのように選んでいるのだろうか。絵本紹介の本、絵本の専門雑誌、新聞の紹介欄、『葉っぱのフレディー』のように話題に上った本、絵本の研修会や講習会で紹介された本、絵本の購入者としては、絵本にかかわる仕事をしている人、小さい子どもを持つ親、幼児教育関係者、幼児教育や児童文学を学ぶ人たち、最近は絵本が好きという大人も増えてはいる、そのような人たちが主な購入者だろうか。絵本を読むのには何か目的があるのだろうか、何を目安に絵本を選ぶのだろうか。「絵本は独自の表現形式と構成要素を持つ〈芸術の一形態〉である。絵本には構造上の 3 要素があるという「視覚表現と言語表現が互いに補完し合っていること」「向かい合った二つのページが同時に提示されること」「ページをめくることによってドラマが生み出されること」（香曾我部秀幸『絵本を読むこと』翰林書房 2012）^{#1} 絵本は読者が手に取ってページをめくる、ことによって成り立つ、したがって読み手である読者もまた絵本の構成員であるということなのだ。より良い、興味ある絵本が作られるためには、読者の存在が欠かせない。「今を生きる大人が、今を生きる子どもたち（読者）に向けて送り出した新刊絵本。ささやかなよろこびも、漠然とした不安も、とりとめのない日常も、同じ空気を吸って生まれてきた絵本。きょうの絵本あしたの絵本。どうぞ手に取って、新しい表現を味わってみてほしい。」と新刊に対してのエールを広松由希子は送っている。

（広松由希子『きょうのえほん あしたのえほん』文化出版局 2013）^{#2}

「子どもの頃の読書週間は大人になってからどう影響するか？」という調査を国立青少年教育振興機構が調査をし、2013年2月23日付けで報告書を出している。^{註1}

〈青少年調査の結果〉 調査対象は高校生および中学生 21,168人

- ・その半数は読書が好きで、本も読んでいる。高校生では中学生に比べその割合は低い。
- ・多くの高校生・中学生は、図書館から本を借りていない。
- ・就学前から中学時代までに「本を読んだこと」や「絵本を読んだこと」などの読書活動が多い高校生・中学生は、1か月に読む本の冊数や1日の読書時間が多い。
- ・就学前から中学時代までに読書活動が多い高校生・中学生ほど、「未来志向」、「社会性」、「自己肯定」、「意欲・関心」、「文化的作法・教養」、「市民性」、「論理的思考」のすべてにおいて、現在の意識・能力が高い。特に、就学前から小学校低学年までの「家族から昔話を聞いたこと」、「本や絵本の読み聞かせをしてもらったこと」「絵本を読んだこと」といった読書活動は、現在における社会性や「文化的作法・教養」との関係が強い。就学前から中学時代までの読書活動と体験活動の両方が多い高校生・中学生ほど現在の意識・能力が高い。
- ・就学前から中学時代までに読書活動が多い高校生・中学生は、就学前から中学までの体験活動も多い。

この調査の結果から就学前からの読書活動への関わりが子どもたちの未来に大きく作用していることがうかがえる。しかし、読書活動だけが人格形成に影響することではなく、中学性・高校生と学年が上がるにしたがって他にもっと打ち込めるものが出てくることもあり、またその人と本との相性ということも出てくる。高学年になれば何かに一生懸命になることが大切になってくるだろう。小・中・高校の読書活動の中では、特に小学校では朝読書の活動や図書室の充実、司書教諭の存在、図書館の利用などがその支えとなっていると思われる。また学校と連携する読み聞かせボランティアの存在も見逃すことはできないだろう。各地域の図書館、公民館、博物館という場合もある。大型スーパーマーケットや大型書店の図書活動、文庫活動、地域の子ども活動などいろいろな場に参加をし、読書活動の中心をなしている。読み聞かせのグループ、団体は現在では数えきれないほどが存在している。また絵本研究も活発になされているが、ただ単に絵本が好きだから、時間ができたからということなどから参加をするということもあり、問題も生じているようだが、今や読み聞かせボランティアの存在は欠くことのできないものになっているのは事実だろう。読み聞かせボランティアについては後述する。

就学前から中学時代までの読書活動と調査の中で再三言われているように、就学前となれば幼稚園、保育園、家庭での絵本との出会い、読み聞かせがその後の読書週間に影響を及ぼすという結果はうなずけることではある。だが、ここでもやはり、子どもが読まねばならないということはないと言いたい。絵が得意な子ども、音楽が得意な子ども、スポーツが得意な子どもがいるように、ねばならないのではなく、大人の責任として出会う場を用意する、出会う場を自然に増やすなどが、読書活動を支えることになるのではないだろうか。また集団で読むことと子どもがひとりで読むことの違いも生じてくる。幼稚園、保育園では先生が何を選び、どう読むのか、子どもが何を選び、どう読むのかもまた大切なことになってくる。

II. 絵本と紙芝居

絵本と同じように絵を見、読み手が読むということで使われているものに紙芝居がある。多数の幼稚園、保育園で、保育の中に絵本と紙芝居を組み込んでいる。幼稚園では朝、全員が集まるまでの時間、帰りの時間の前に遊びで興奮した気持ちをクールダウンするため、保育園では午睡時間の前にやはり気持ちを落ち着かせるために、絵本あるいは紙芝居が読まれている。それだけではなくいろいろな場面で絵本、紙芝居は活動と結びついて使われることも多い。

紙芝居は芝居であって演じるということが言われる、「演じる側と観る側が向かい合う対面芸術、小さな演劇（芝居）なのです。だから文でなく脚本、紙芝居は読むのではなく演じる文化です。」（長野ヒデ

子、右手和子、やねみつのり『演じてみようつくってみよう紙芝居』石風社 2013)^{※3} 一方絵本は静かに淡々と読みなさいと言われた時期があった。絵本に関しては、その時の子どもたちの状況で読み方は変わって当然と思っている。紙芝居もまた同様に考えるが、紙芝居を使用する場合は絵本との違いがある。「演じ手（読み手）のせりふの言い回し、画面の動かし方や抜き方一つで一枚の動かない絵が動き飛出し、観客との共感の世界が生まれる。」松居直は紙芝居と絵本は異なったジャンルのものであり、紙芝居は絵本とは違う要素を持っている文化財で、しかも絵本に極めて近いもの、演劇と文学の違いにも匹敵する。発生もちがうし表現も違う。紙芝居は紙芝居として、絵本は絵本としてそれぞれの中で評価されるべきものであると言う。保育者は絵本と紙芝居を巧みに使い分けをしている。紙芝居は絵本に比べて、文字が裏に書かれているので読みやすい。舞台を使わないことから、真ん中に折り目がないので持ちやすいとでもいうのか、本来してはいけない手持ちをしてしまっている姿を見ることがある。大きさが同じでページ数が限られていることから、話が単純化されているので、絵本よりも短時間で読むことができてしまう。紙芝居の特徴である、「抜き」、「半抜き」、「ずらし」、「ゆらし」などは手持ちであれば当然できないことになる。さらに、ページを前から後ろへ、飛び越してしまうということが、平気で行われてしまっている。時間がないからと言って、大急ぎで読み、さらに「続きはまた明日」となる、このような読み手は、絵本に対しても同じ気持ちしか持っていないことが推察される。「演じる」という紙芝居が「ねらい」としている別の世界への入り口、ということへの配慮がどれほどに意識されているのだろうか、という疑問が残る。紙芝居と絵本が共通の役割を持っているが違いもまた明らかであることを明確にしたいものである。紙芝居は読書ではない、紙芝居は大勢を対象にし、絵本は基本的に一对一、一人に語り掛けるものとされている、しかし幼児期、就学前期の重要な聞くこと、見ること、楽しむこと、演じるということからも生きた言葉を紡ぐことの時間であると考えたとその違いを正しく認識したうえででの使い方をする必要がある。紙芝居を絵本の代わりにすることはできないし、絵本を紙芝居にも代えることもできないのである。紙芝居はなかなか家庭で使われることはないものであることから、幼稚園、保育園でその違いを生かして使われることが、何より保育者にとって、また子どもたちにとって楽しい時間を増やすことにつながるだろう。

III. 耳から入る文字としての言葉

平成 17 年 7 月、「文字・活字文化振興法」が施行、翌平成 18 年 4 月、「文字・活字文化振興法の施行に伴う施策の展開」が発表される。

地域における文字・活字文化の振興

- ブックスタートの普及による子育て支援
- 本の読み語り支援、読書アドバイザーの育成
- 移動図書館の普及・拡充
- 作文アドバイザー（著述業、作家等）のネットワーク化による作文活動の奨励
- 読書・絵本のまちづくり活動の支援、小規模書店の個性化・ブックフェア等の支援
- 教育機関の図書館の地域開放などの支援

その他公共図書館について 3 点が掲げられている。

2000 年には「子ども読書年に関する国会決議」がなされ、「平成 11 年わが国をはじめ世界 71 か国の元首、首脳が国際連合の「子どものための世界サミット」に集い、「子どもを政治の最優先に」と誓いあっている。平成 12 年 5 月 5 日「子どもの日」に、ひろく世界の子ども文化に貢献し得る国立の国際子ども図書館を開館することを決議している。

「本とふれあうことによって、子どもたちは言葉をまなび、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生き抜く力を身に付けることができる。」（広瀬恒子『読書ボランティア——活動ガイド』一声社 2008)^{※4} と謳った。法律がどれほど崇高な条例を掲げようが、それが実行されなけ

れば、それを広く人々の中に、子どもたちの手に届くように働きかけがなされなければ、始まらない。そこを担ったのが、いろいろな場面で展開されている「読み聞かせの活動」だったと言えるだろう。松居直は『こども えほん おとな』の「言葉は誰からもらったか」で、「私は国から言葉をもらった覚えはありません。私は母親から言葉をもりました。一略一命を支える言葉というものの、日本語というものを、母親を中心として親や兄弟、大人のかたからいただいたんだということに気がついたんです。言葉で一番大切なのは聞き覚えです。聞き覚えするためには、その周囲の大人たちが本当に豊かな言葉を使わなければ、聞き覚えられない。」(松居直『こども えほん おとな』絵本で子育てセンター 2013)^{#5}と言う。最近の傾向でいろいろと言われているようにテレビに子守りをさせ、お乳を飲ませながら携帯電話の画面を見、親子で外出するときにPCタブレットを持参し、子どもが退屈したら、ゲームや動画を見せる親が増えている現状では、家庭に豊かな言葉はあるのだろうか。

文字を読めるだけでは読書ではない。「物語を聞けるというのは、物語という目に見えない世界を、自分のところの中に見えるようにする、絵(イメージ)にする力です。一般に想像力(イマジネーション)といわれる力です、想像力が豊かであれば、人間は見えないものを見ることができる。絵本は、子どもたちの想像力に大きなかわりがあります。絵本は幼児にとって体験を豊かにする機会をあたえる」そこで問題になるのは、絵本の質だと言う。「耳から豊かな言葉を聞く体験を深く持てば持つほど、文字を通して目から読み取る言葉に、豊かなイメージや感情や人間らしさを感じ取ることができるようになるものである。」(松居直『絵本をみる眼』日本エディタースクール出版部 1978)^{#6} さらに松居は、最近では幼児に早く言葉を教えようとして、目から入る文字を重視し、早くひとりで読めるように指導する傾向にあるという。このことで子どもが最も人間らしい言葉を耳にする機会がなくなってしまうというのだ。また松居は「この頃の子どもの生活をみていますと、家庭で一番子どもに話かけているのは、母親一ではありません。テレビです。子どもはテレビの前に一時間でも二時間でもすわっています。テレビはとめどもなく子どもに語りかけています。」(松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部 1973)^{#7}と言う。家庭で父親や母親によって昔話を語ることが少なくなった今、絵本を人間の言葉で、声に出して読む「読み聞かせ」ボランティアは家庭に代わって聞き手である子どもたちの耳に、言葉が入っていく役割を担っているともいえるのではないか。「乳幼児にとっては、言葉は知識と結びついて重要なのではなく、豊かな、美しい、楽しい、快い、音声やリズムやひびきをもった、生き生きしたものとして、まず存在していると考えられる。言葉は口から出るものであり、それはまず、感情のこもった音声をともなった耳に聞こえるものである。」(松居直『絵本をみる眼』日本エディタースクール出版部 1978)^{#8} 子どもが見る、さし絵(絵)の質により、子どもが描くイメージの質も当然影響を受ける。類型化したイメージにならされてきた子どもはものを見ても、類型化したイメージでしか受けとめられなくなってしまう。「一冊の本を読んでも、そこにより豊かな世界を発見するか、ほんのわずかなものしかくみ取れないかは、読み手(子ども)の想像力いかんです。その重要な出発点の一つが絵本にあるのです。小学校へいってからは、読書の問題はほんとうはおそいで、幼児期に豊かな想像力を身に着けていることが、読書なのです。読書のかぎはよい絵本の中にあります。」(松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部 1973)^{#9} 保育者は絵本をどのように選び、子どもたちに読んでいるだろうか。保育者自身が絵本を楽しんでいるだろうか。教材研究すると同じように、絵本研究をしているだろうか。保育者と同様に保護者の存在もまた絵本を読むことには重要な存在であるが、保護者の絵本への関心と役割は、両親がいる場合は母親に任されてしまっているように思えるが、保護者もまた絵本を、声を出して読むことで、子どもたちに語ること、伝えること、親子の時間を作ることができる。また絵本を子どもと楽しむことで、親子の間の共感を保ち、子どもたちが豊かな言葉を持つことができるようになるのではないだろうか。

IV. アンケートから

1. 読み聞かせについてのアンケート（学生）

藤女子大学保育学科1年生、人間生活学科1年生 148名

項目

- ① 絵本は好きですか。
- ② 読み聞かせをしてもらったことはありますか。
- ③ 絵本を読んできたのは誰ですか。
- ④ 何歳頃ですか。
- ⑤ 読んでもらった中で好きな絵本を覚えていますか。その題名は。
- ⑥ どんな時に読み聞かせをしてもらいましたか。
- ⑦ 今好きな絵本はありますか。どんな時に読んでもらいましたか。
- ⑧ 気に入った本は買う派ですか、借りる派ですか。
- ⑨ 一か月で何冊くらいの本を読みますか。

アンケート対象は18歳から19歳の女子大学生、保育学科と人間生活学科の148名。①絵本は好きですか、には148名全員が好きと答えている。②読み聞かせをしてもらったことがありますか、には147名がしてもらったとあり、1名がいいえであった。このいいえと答えた人は、その横に「覚えていません」の書き込みがあった。もしかすると読んでもらった経験がある可能性も否定はできないが、ここでは貴重な「いいえ」のサンプルとさせてもらう。したがって③、④、⑤、は無回答、⑥にはなぜか眠るとき、遊んでいるときという記述があった。⑦の今好きな絵本には記述がない。

読み聞かせをしてもらった147名の結果では、2歳から4歳・5歳頃に読んでもらう経験をしている。読んできたのは、78%が母親、次に父親、幼・保の先生、先生、親という記述もある、祖父母、おば、おばさん、読み聞かせボランティア、児童館の人、図書館のおばさん、小学校の役員のお母さん、クラスのひとのお母さん、知り合いのお姉さん、多種の人たちによって絵本が読まれていることが見えてくる。一転して、⑦今好きな絵本はありますかに対して、52名が記述なし、一冊あげているのが40名。また一か月に読む本は一冊、あるかなしの答えだった。ほとんどの学生が母親、父親、祖父母などによって絵本を読んでもらっている。絵本を読んでもらい、耳から言葉が入る経験をたくさん持つことが、その人のその後の人生において豊かな言葉をもつことになるとこれまで松居直のいろいろな記述から導き出してきたが、現在の大学生、若い世代の言葉状況を耳にすると、松居の言う幼児体験とはどこかに断絶があるのだろうか。「絵本は好きですか」の問いには100%の人が「好き」と答え、読み聞かせをしてもらいましたかに対しても、ほとんどが「はい」と答えている。これは絵本というものに対しての幻想だろうか。「絵本」は楽しいもの、かわいいもの、接しやすいもの、玩具の一種、また楽しかった記憶、お母さんがそばにいた記憶、誰かに読んでもらった心地よさの記憶が好きと答えることにつながるのだろうか。「今好きな絵本は？」には、半数が無回答、読んでもらった絵本が本を読むという興味、好奇心には結びつかなかった。決してそれは悪いことではないのだが、学齢期の中で、再び本と出会ってほしかったと思う。成育期間において家庭、学校、友人たちとの会話は言葉を育てているのだろうか。またTVなどのメディアからの刺激、文字を使わない、書かない日常、携帯電話や手持ちのPCでの例文を選んで作る文、仲間だけに通じる短縮の流行語の反乱は何を語っているのだろう。そして電子書籍が、キャラクターものやゲームの形で、すでに絵本の世界にも侵入してきている。幼児期の読み聞かせの大切さはもとより、成育期、小中高、さらに大学生に対しても「絵本を読むこと」、「絵本を、声を出して読むこと」が重要な時代になってしまったといわなくてはならないのかもしれない。

V. 読書ボランティア活動の広がり

読書ボランティアのキーワードは「本」と「子ども」、「大人と子どもという“人と人”がかかわる活動、本という、個人的な価値観により評価のさまざまな文化財と子どもを結ぶ営み」であり、「読書ボランティアの活動とは、本という媒体を通して、人間の内面的な世界に関わる営みなのだ」と言う。(広瀬恒子『読書ボランティア——活動ガイド』一声社 2008)^{※10} 読書ボランティア活動には2つの流れがあり、1つは60年代からの文庫活動。もう1つは2000年前後から自治体など行政や学校、出版業界からの子どもの読書推進策によって生まれてきた活動である。1994年子どもの権利条約が発効され、少子化であることも伴って子どもたちへの関わり、視点を向けることの重要性が問われたことも、活動の活発さと呼んだと思われる。2003年文部科学省は全国の読書活動グループに対しての実態調査を行っている。『全国読書グループ要覧』によれば、子どもの読書に関わるグループが5733、そのうち3088グループは実演グループである。「実演グループとは、子ども文庫のように本のある場を持たず、子どものいる保育所、学校、図書館、児童館、公民館などに出向いて、読み聞かせやおはなし会をするボランティアグループです。北海道361、東京333、神奈川260、大阪329、福岡262、どうしても人が多く集まる大都市に多くなっている。」(広瀬恒子『読書ボランティア——活動ガイド』一声社 2008)^{※11} ひとりで活動しているなど、行政が把握していないものもあり、実際にはもっと多く存在していることがうかがえる。2013年現在ではさらに増えていることが想像できる。読書ボランティアの活動はおはなし会など実演のほかに、子どもの読書環境を整備するための活動もある。

① 活動の流れ

文庫活動は、1950年代まだ子どもの本というものの出版は多くなく、小学校などでも図書室や各教室に家庭から持ち寄った本を貸し出す学級文庫が置かれていた。70年代に入り図書館活動がアメリカなどの影響を受けて活発化し、子ども図書館や、個人の自宅で文庫を開くなど全国に広がった。しかし、やがて塾や習い事で文庫を利用する子どもの数が激減した。そこで子どものいるところへ出向いていくという活動へと転換していくことになり、現在の読書ボランティア活動につながっていくことになった。

② 1990年代以降の流れ

90年代、特に阪神・淡路大震災がボランティアに対する意識を変えた。誰もがボランティアに積極的に参加する、その行き先を探し始める。「1997年、文部省は、教育改革プログラム素案に新しい施策として公立中学校に「ボランティア活動の促進」を位置づけ、1998年、中高教育審議会は、「新しい時代を拓く心を育てるために——次世代を育てる心を失う危機」の答申の中で、「保護者が学校支援ボランティアとして学校図書館の活動に参画していくことも好ましいことと考える」と言及した。」(広瀬恒子『読書ボランティア——活動ガイド』一声社 2008)^{※12} 平成11年・12年度学校図書館ボランティア活用・実践研究指定校事業実施要綱」にこう謳われている。

1. 趣旨 学校図書館の指導体制の充実を図るため、地域の人材や保護者を学校図書館のボランティアとして受け入れ、司書教諭への支援などに活用することによる学校図書館の充実方策について、実践的な研究を行う。
2. 指定校
3. 指定期間
4. 研究内容 研究指定校は、次のような事項について研究する。
 - (1)読みきかせなど児童生徒の読書に対する支援
 - (2)学校図書館のイベントの運営や広報活動
 - (3)司書教諭への支援
 - (4)その他

このように公的に読書活動のための支援が公的機関によって押し進められるようになった。2000年「子どもの読書年」、2001年、「子どもの読書活動の推進に関する法律」が制定される。2002年、「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」で図書館や学校図書館にボランティアの参加を促進し、連携し

ていくことが位置づけられた。「読書ボランティアグループが学校などに活動先を求め始めたころは門前払いだったり、胡散臭がられたことあったのだが、現在は法律や条例の後押しもあり、出張依頼は後を絶たない。」(広瀬恒子『読書ボランティア ― 活動ガイド』一声社 2008)¹³

VI. A幼稚園 ― 絵本活動・読み聞かせの取り組み

・札幌市にあるA幼稚園 在園児数 453名、14クラス 職員数 42名

毎年年度初めての参観日(5月)各クラスで、絵本の読み聞かせの大切さを保護者に伝え、懇談会で保護者に、クラスで人気のある絵本を紹介して、実際に教員が保護者に読み聞かせをして聞いて頂く。

毎月、学年便りで各学年一冊ずつ季節や行事に合った絵本や、子どもたちに人気のあるお勧め絵本を紹介して保護者の方々に絵本に興味を持って頂けるようにする。例として、2013年8月の学年便りでは、年少「きんぎょがにげた」、年中「すいかばたけ」、年長「オニじゃないよ おにぎりだよ」を紹介した。年間各学年12冊ずつ紹介する。さらに一学期終了時、TVやDVDなどの機械の音ではなく、人の「声」で応答的に関わるのが大切であること、それには絵本の読み聞かせが有効であることを記した「おすすめ絵本便り」を保護者に配布する。その「絵本便り」で、現在各クラスで人気のある絵本を紹介し、家庭での読み聞かせが広がるように促している。(各クラス2冊ずつ絵本を紹介しているため年少4クラスで8冊、年中5クラスで10冊、年長5クラスで10冊 合計28冊紹介している。)

「おすすめ 絵本便り」一学期末発行

・年長



図1 パパ、お月さまとって!



図2 としょかんライオン



図3 ねこごかなのはなび

・年中



図4 へんしんトンネル



図5 ふしぎなナイフ



図6 しずくのほうけん

・年少



図7 すいかくんがね・・



図8 おへそのあな



図9 だるまちゃんとかみなりちゃん

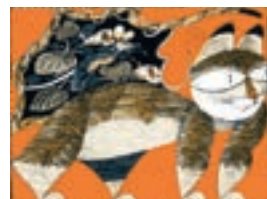


図10 ふたり

手紙の締めくくりは、研修会で学んだ「子どもの絵本の時間は、人生の素晴らしい親子の瞬間としての子どもの記憶に残るはずですよ。お子様とのコミュニケーションの手段として、絵本をとらえ、自由な発想で楽しんで下さい。」という言葉でまとめ、絵本を通じて、親子の会話が広がって欲しいと願っている。

また、お誕生会（11月生まれ）のインタビューで、子どもたちや先生たちの好きな絵本を聞き、その絵本の内容を紹介して、他の人が好きな絵本にも興味を持って貰う機会を作っている。

家庭で保護者に読んで貰っている絵本の中で先生に読んでほしい絵本や、友達に紹介したい絵本を幼稚園に持って来て貰い、幼稚園で読み聞かせをするという活動をしている教員もいる。

毎月園に届く月刊の絵本を各クラスで読み聞かせをしてから自宅に持ち帰り、自宅でも保護者に読んで頂けるよう促している。

毎月のお便りや学期毎に配布するお便りの中で紹介した絵本や、長年園で大切にされている多くの絵本、また、各教員が自ら選んで購入した絵本を保育時間に取り込んでいる。年間の計画の中に絵本が位置付けいており、各教員が年齢にあった絵本を子どもたちに提供している。その特徴的なものに「ローテーション絵本」がある。

「ローテーション絵本」について

「ローテーション絵本」は、1ブロック10冊、14クラスあるため、合計140冊となる。「ローテーション絵本」は、約一ヶ月ごとに、各クラスで回して読む。14のブロック毎に色分けのテープが背表紙に貼ってあり、各ブロックの絵本が混ざらないようになっている。

「ローテーション絵本」には、読み継がれている名作絵本が数多く選ばれている。

・黄色グループ：「おおきなおおきなおいも」「どうぶつのおやこ」「ふたり」「てぶくろ」「どろんこハリー」「はけたよはけたよ」「3びきのくま」「ちびでぶカバくん」「おばけのバーバパパ」「くまがふしぎにおもったこと」

・黄色グループ



図11 てぶくろ



図12 どろんこハリー



図13 はけたよはけたよ

- ・薄紫グループ：「すてきな三にんぐみ」「どうすればいいのかな?」「もりのなか」「おかあさんがおかあさんになった日」「三びきのやぎのがらがらどん」「ぐりとぐらのえんそく」「せんたくかあちゃん」「はけたよはけたよ」「うそつきなやぎ」「なきむしえんはおおさわぎ」
- ・薄紫グループ



図 14 すてきな三にんぐみ



図 15 もりのなか



図 16 おかあさんがおかあさんになった日

このような組み合わせが他に 12 グループある。

絵本の管理においては、人気がありボロボロになった時、同じものを入れる時もあり、新作の違う絵本を入れ替えることもある。

「ローテーション絵本」があることで、絵本を選ぶ際に、自分の好きな絵本だけに偏ることを避けることが出来、経験の浅い教員はここで名作に出会うこともある。

先生たちがクラスで読み聞かせる絵本をどのように選んでいるか聞いてみたところ、「自分の好きなもの」「子どもたちの年齢にあったもの」「子どもたちが興味を持っている内容」「季節にあったもの」「絵本の長さ」「絵の雰囲気や色づかい」「ユーモアのあるもの」「ジャンルが偏らないように色々な種類のものを選ぶ」「子どもたちに伝えたいことが書かれているもの」「行事にあったもの」など、教員は、絵本の読み聞かせを大切に考え、日々子どもたちが喜ぶ絵本をアンテナを立てて探すことに努めていることが分かった。

また、情報を鵜呑みにしないで各自が下読みをして自分が面白いと思ったものを選んでいくことも分かった。

「ローテーション絵本」など、沢山の絵本の中からその時の子どもたちにあった絵本を選び、ほぼ毎日絵本の読み聞かせをしているため、一冊の絵本を大切に選んでいる。この「ローテーション絵本」の方法は子どもの絵本の出版が盛んになり始めたころに取り入れられ、現在も絵本を重要視した取り組みが継続されている。

家庭での母と子、父と子等の一对一の読み聞かせと違い、幼稚園、保育園での読み聞かせは、クラスの子どもたちが一斉に聞くことが多いため、絵本のストーリーを活かしたごっこ遊びが皆の共通理解のもとに広がり易い。

「しらゆきひめ」、「シンデレラ」、「アリババと 40 人の盗賊」などの読み聞かせを聞いた後、自然発生的に子どもたちが役割分担をして、ごっこ遊びを楽しみ、劇遊びに繋がる例や「こびとづかん」の読み聞かせの後に、子どもたちが「こびと」の情報を共有して、「こびと」探しの探検に出かけることもある。

幼稚園での絵本の読み聞かせは少子化で兄弟が少ない子どもたちが絵本を媒体として絵本の内容を共有し、いろいろな遊びに発展させていく中で、想像力を豊かにし、人間関係を広げ、言葉を活かしたコミュニケーション能力を高める機会にも繋がっている。読み聞かせは、単にそれを聞くことだけではなく、子どもたちの遊びを広げる原動力にもなると考えられる。

VII. 考察

「絵本は楽しいものだ。子どもにとって読書は教養でも勉強でも、ためになる、役に立つものでもない。それはただ一つ面白く、楽しいものなのだ。(松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部 1973)¹⁴ 本が面白く、読むことが面白くなったら子どもは何も言わなくても本を読む。しかし、やはり松居は「氾濫している子どもの本の中には、ほんとうにおもしろい本が少ない。そしておとなは、何がおもしろい子どもの本なのかを知らない。」と言う。絵本にも同じことがいえる。おとなはかつて絵本を読んでもらったこと、読んだことを忘れてしまっている。自分が何をどう楽しんだのか、何がおもしろかったのか、字だけでなく絵を読み込んでいたことを、忘れている。子育て期間を終えた一般の大人、特に男性は子どもの介在しない場で絵本となると、とたんに途方に暮れる。子どもだけでなく、母と子だけでなく、大人たちが記憶を継続していくだけでも親と子がつながりを感じ合えるのではないだろうか。

読み聞かせについて、松居は大人が読み聞かせをするのだけれど、考え方としては「語る」のだと言う。「読み聞かせ」という呼称には今までも抵抗を示す向きもあり「読み語り」とか「読み合い」ということが言われた。「聞かせ」という命令調になるところが懸念されたのだが、今や「読み聞かせは」固有名詞化しており、読む側が「聞いてもらう」という気持ちを持ち続けることが「読み聞かせ」を成功させるうえで重要となるだろう。読み聞かせをする時、心しておかなければならないことは、「語り手が感動し、共感している絵本は、語り手がよく理解し、心のなかに豊かなイメージができ上がっているほど、聞き手にそれは伝わり、聞き手の理解を深め感動や共感を呼び起こす。これは語り手と聞き手の基本的関係です。」(松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部 1973)¹⁵ と言う。読み手となる人たちは自分の趣味ではなく、時間つぶしでなく、絵本と向き合う自分を把握し、謙虚になり、絵本を読み込んでいく姿勢を持つことこそ大切なことだろう。日頃学生たちから感じている言葉の危機感について松居はこのようにも言う「もし私たちが自らの言葉とその質とその内容をもう一度考えて、自らのことばを豊かにしなければ、そして真面目に子どもたちに語りかけなければ、いよいよことばの世界は崩れてゆくだろう。」(松居直『絵本とは何か』日本エディター出版部 1973)¹⁶ 今若い学生たちには昔話を語ってくれる人はなく、昔話はせいぜい絵本で読むくらいであり、各国の民話も知らず、グリム童話もアンデルセン童話も知らない。白雪姫はディズニーが作ったものと真面目に答える。現代の若者たちは昔話の約束事、童話の決まり事などを知らずに育ってしまった。したがって自分たちが昔話や童話をもとに何かを演じたり、脚本を作成するとき、絵本をお手本とするが、もともとの昔話や童話を知らないために、必然が生じてこない。変えてはいけないうところと変えてもよいところの区別がつかないのが現実なのである。

ノンフィクション作家の柳田邦男は「絵本は人生で3度楽しめる、一度は自分が子どものとき、2度目は子育て中、3度目は年齢を重ねてじっくりと自分のために絵本を読む」と言っている。「絵本は子どものためのもの」という誤解があり、大抵の大人は子育て中でもない限り、絵本を読もうとしない。惜しいことだと思う。絵本は、子どもたちが第一の対象ではあっても、実は読む人の人生経験が豊かになるにつれて、内容を深く味わえるようになるすばらしいメディアであり、自分自身の生き方や心の持ち方や子どもの心の成長などを考えるための滋養分となるものなのだ。」(柳田邦男『大人が絵本に涙する時』平凡社 2006)¹⁷ 何に対しても「かわいい!」としか表現できない若い世代にとっても、絵本を、声を出して読んでみるが必要なのではないだろうか。アンケート調査をした学生たちが、「読み聞かせをしてもらいましたか」の問いに「はい」と答えた人の全員が、読んでくれた人を覚えていた。読んでもらったことを覚えていること「それが残っているということは、その子どもがやがておおきくなって、大人になった時に、自分の中に残っているあの物語を、読んであげたいという風に思う、ひとつのきっかけになると思います」(松居直『こども おとな えほん』NPO 法人 絵本で子育てセンター 2013)¹⁸ したがって人生3度の楽しみではなく学生時代に自分の記憶と再開することを加え、4度楽しむことが大切になっているのが今の時代のように思える。

VIII. まとめ

誰もが読み聞かせをしてもらい、読み聞かせを試みることも大切かもしれない。絵本は人から人へ、声を通して、読む人の心を通して、読んでもらっている人に伝えられていく、生きた存在なのではないだろうか。「絵本と子どもの出会いは、基本的には非常に個人的なものであり、一冊の絵本がその子の心と深く共鳴する時、その子にとってその一冊は「よい絵本」となるのではないのでしょうか。」(佐々木宏子『絵本と子どものころ』JULA 出版局 1993)^{注19}「読み聞かせ活動」ボランティアは、子どもたちだけでなく、幼児から中高生に対して、またその親たちも交えて積極的に、どこへでも出かけていき、絵本との出会いを広げる役割を担っている。「読み聞かせ活動」に参加する人が増えているということは、大量に出版されている絵本を選び、手に取る人が増えているということでもあり、絵本に視点が向いているということでもある。「読み聞かせ活動」が耳から入る言葉、日本語を豊かにするための一端を担っているのならば、今後の「読み聞かせ活動」ボランティア人口の増加も、プラスに働くのではないだろうか。絵本の世界にも電子書籍の波は確実に押し寄せている今、園によって違いはあっても、幼稚園、保育園での、絵本への取り組みは幼児期だからこそその言葉を育て、心をそだてる重要な活動であることを改めて感じるものである。

要旨

“絵本は子どもに読ませる本ではなく、大人が子どもに読んであげる本です。”と松居直が十数年言い続けている。絵本を、声を出して大人が読んであげることによって共通体験を持ち、子どもたちは絵本の世界の中に入り、物語を紡いでいく力をつける。読み聞かせによって、耳から言葉を聞く。「書かれた言葉と語られる言葉は違う。目で読む言葉と耳で聞く言葉も違う」と、松居直は言う。耳から入った言葉はやがて文字と結びつき、子どもは一人で本を読むようになっていく。子どもたちが幼児期に出会う幼稚園の先生たちの絵本への取り組み、また 1970 年代頃から盛んになってきた絵本の「読み聞かせボランティア活動」が担っている子どもたちと絵本を結びつける役割に焦点を合わせ、絵本の持つ力、共に読むということについて考察を加えた。

引用・参考文献

- 註 1. 子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究
「子どもの頃の読書週間は大人になってからどう影響するか？」
独立行政法人 国立青少年教育振興機構 2012 年 2 月 23 日。
- 註 1. 香曾我部秀幸『絵本を読むこと』翰林書房 2012。
註 2. 広松由希子『きょうのえほん あしたのえほん』文化出版局 2013。
註 3. 長野ヒデ子, 右手和子, やねみつのり。
『演じてみようつくってみよう紙芝居』石風社 2013。
註 4. 広瀬恒子『読書ボランティア——活動ガイド』一声社 2008。
註 5. 松居直『こども・えほん・おとな』絵本で子育てセンター 2013。
註 6. 松居直『絵本をみる眼』日本エディタースクール出版部 1978。
註 7. 松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部 1973。
註 8. 松居直『絵本をみる眼』日本エディタースクール出版部 1978。
註 9. 松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部 1973。
註 10. 11. 12. 13. 広瀬恒子『読書ボランティア——活動ガイド』一声社 2008。
註 14. 15. 16. 松居直『絵本とは何か』日本エディタースクール出版部 1973。
註 17. 柳田邦男『大人が絵本に涙する時』平凡社 2006。
註 18. 松居直『こども えほん おとな』NPO 法人 絵本で子育てセンター 2013。
註 19. 佐々木宏子『絵本と子どものころ』JULA 出版局 1993。

図版

- 図1. エリック・カール もりひさし訳『パパ、お月さまとって!』偕成社 1986.
- 図2. ミヒャエル・ヌードセン作 ケビン・ホークス絵 福本友美子訳『としょかんライオン』岩崎書店 2007.
- 図3. わたなべゆういち『ねこざかなのはなび』フレーベル館 2011.
- 図4. あきやただし『へんしんトンネル』金の星社 2002.
- 図5. 中村牧江 林健造 福田隆義『ふしぎなナイフ』福音館書店 1985.
- 図6. マリア・テルリコフスカ ボフダン・ブテンコ うちだりさこ訳『しずくのぼうけん』福音館書店 1969.
- 図7. とよたかずひこ『すいかくんがね・・・』童心社 2010.
- 図8. 長谷川義史『おへそのあな』BL 出版 2006.
- 図9. かこさとし『だるまちゃんとかみなりちゃん』福音館書店 1968.
- 図10. 瀬田貞二『ふたり』富山房 1981.
- 図11. ラチョフ うちだりさこ訳『てぶくろ』福音館書店 1965.
- 図12. マーガレット・グレアム ジーン・ジオン わたなべしげお訳『どろんこハリー』福音館書店 1964.
- 図13. かんざわとしこ にしまきかやこ『はけたよはけたよ』偕成社 1970.
- 図14. トミー・アンゲラー いまえよしとも訳『すてきな三にんぐみ』偕成社 1969.
- 図15. マリー・ホール・エッツ まさきるりこ訳『もりのなか』福音館書店 1963.
- 図16. 長野ヒデ子『おかあさんがおかあさんになった日』童心社 1993.